

ばらの種類とその特性

明道博

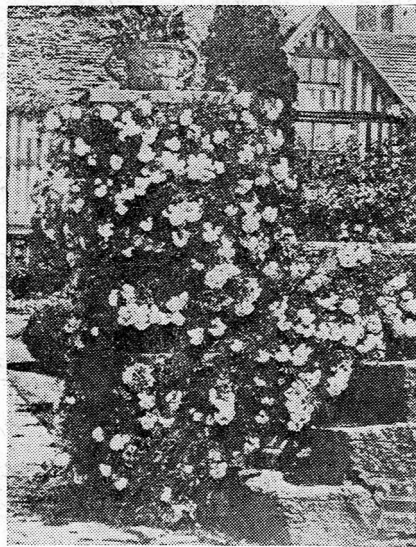
最近ばらの栽培は全国的に見て非常な勢いで伸展しつつある。これは一つには現在の日本における時代思潮をよくあらわしているものといえよう。しかしとに角わが国においてはばらが園芸品種の導入により流行の萌しが現われた明治の初期から、ばらに対する日本人の嗜好は一貫して向上の一途を辿つて来たということが出来る。これは結局ばらが他の花卉に比して独特の長所を持つてゐるためであらう。

一 ばらの特長

ばらはいふまでもなく灌木であつて木本植物である。ところが年々幹の基部から旺盛に生育する枝が発生して、これが老枝に代つて樹勢を保つて行くから、多分に宿根草的な性質を持つてゐるということが出来る。もつとも蔓性の品種では前年枝の側枝に花をつけるが、その前年枝が年々基部から発生したものである。

木本花卉は、これを庭に植えた場合草本花卉では見出すことのできない独特の感じを与えるものである。われわれはこの感じを示すのに「骨が入る」と言つてゐるが、庭の景観に堅牢さ、安定感、持続感などが出てくる。勿論ばらは灌木であるからこの

感じは喬木に比して弱いが、草本だけではこの感じが全く出ない。他方花についてだけ考えれば、花木類の



欠点は、花が一期に限られるということである。つじにしても、ぼたんにしてもその他優れた花灌木、喬木の類は沢山ある。しかし開花は年に一度というのが一般である。以上はばらが他の花卉の追隨を許さぬ本質的の長所であるが、この他ばらがある特長としてはまず品種がすこぶる多くそれらが、蔓性、小輪多花性などの生態的変化を含むこと、色彩が青色を除けばほとんどあらゆる調子を含むこと、芳香に富むこと、栽培が温、暖帯各地で可能なことなどを挙げる。

このような諸長所を兼ね備えたばらの花がわれわれに与える感じは、高尙且つ明快であつて、この点、日本ばかりでなく世界的に愛好される一般花として流行の一途を辿つてゐるのもまた宜なるかなである。

二 ばらの種類

蔓性大輪系のアメリカン・ピラーを門柱に絡せた図である。本品種は夏の季咲きで、本邦産ウイクライアナに米國産のセチゼラを交配し更にそれに赤色のH.P.系ばらを交配して育成された。赤色、単弁種であつて十五尺ぐらゐ伸びる。

と、一九三〇年版では二千五百十一種、一九五二年版には六千五百五十種であつて、この中約三百は原種であり他は園芸品種である。この目録には古いもので現在あまり栽培されていないものは省いてあるから、実際に園芸品種として過去に登場したもの全部を集めたら倍以上にはなるであらう。前にも述べたようにこれらのばらは、その生育習性において非常にいろいろのものを含んでいる。これらの習性は勿論その品

種が育成された場合の両親、即ち遡れば祖先となつてゐる原種の性質に似ているものであるが、しかし現今のばらは非常に改良の進んだものが多く、祖先とは大部異なつたものになつてしまつてゐるものが相当あることを頭におかねばならない。現在まで最も普通に行われてきたばらの園芸上のわけ方は系統によるものである。

ばらの園芸品種にはつぎに示すことき數系統が挙げられていてそれらにはそれぞれ祖先となつてゐたものの特性が片鱗を現わしている。

(1) テイ系 (記号T)

庚申ばらと言われる支那の四季咲種が主流となつて改良されてきたもので、花付きよく茶の花の香りを持つ。花梗一般に柔く花が俯く傾向がある。葉は一般に薄く、発芽時暗紫紅を呈するものが多い。本邦名で金華山、末広などがこの系統である。

(2) ハイブリッド・パアペチュアル系 (記号H.P.)

本邦名の「不二」がこの系統の代表的型であつて、元來ガリカ系またはダマスセナ系統と庚申ばら系統またはブルボン系統との交配によりできたものと考えられている。前二者は頗る旺盛な發育をする一季または二季咲種で、後二者は四季咲を建前とする系統であつて、従つてH.P.の系統のものは一般に強健で半蔓性であり、花は一季、二季、四季咲のものが含まれ、花は巨大、香も強い。

(3) ペルネティアナ系 (記号Pen.)

二十世紀の初めにフランスのペルネ・デ

ユシュにより育成された H.P. 系とルテア系の黄色小輪種との交配種であつて、黄色を含む美しい複色ばらである。ジュリアン・ポータン、タリレス・マンなどであるが、初期のものは大部分一季咲きであつて後になつて四季咲きが多く出されるようになった。一般に花期は長い、弁の重りが少いと言われる。

(4) ハイブリッド・テイ系 (記号 H.C.)
 大体は H.P. 系と T 系とが主流をなし、前世紀の末から交配育成され来たものであるが頗る複雑な交雑径路を辿つてゐるから、あるものは T 系にあるものは H.P. 系にあるものは Penn. 系に類似した習性をもつてゐる。しかし大体の共通点は蔓性種を除き全部四季咲きで、H.P. ほど強健ではないが、T 系、Penn. 系より強はいといふ。

以上の四系統は古くからいわゆる大輪叢生ばらの系統としてよく知られてゐるものである。ところが最近では H.T. の四季咲性を主流として他の系統の長所を取り入れた品種がそれら相互の交配によつて作られるようになってゐるから、これらは皆 H.C. 系の部類に入るものとされている。現今栽培される新しいばらにはまず H.C. 系と見て差支えないほどになつてゐる。

(5) 矮性小輪系

(記号 D.P. あるものは Pol.)

この系統は前世紀の末にフランスで發表を見たもので、本邦原生の野ばら系統の品種と T 系統との交配により育成されたものとされている。特長は矮性四季咲であり、

花色は純黄色を除き多くの色彩を持つてゐる。

近來この Pol. 系に更に H.T. 系をはじめ他の大輪種を交配して四季咲中輪重弁種が育成されてきており、ハイブリッド・ポリアンサ (記号 H.Pol.) 系として取扱われておつたが、種苗商がこれを H.Pol. としないで、フロリブンダ統 (記号 Fl.) と



して發表、カタログに載せて来たために最近では Fl. の方が一般に用いられるようになった。

(6) シュラブ系 (記号 Shrub)

この系統はごく最近になつてから用いられるようになった名称のもので、以前は見られてゐるものも多くはない。七十品種足ら

ずである。この系統のものは多く立性であつて四〜十尺くらいになるから半蔓性とも呼びうるが、蔓性よりは一般に幹が堅牢である。系統として新しく今後一層の改良が期待されるものである。系統の祖先となつてゐるものには非常に多くの原種が含まれてゐるが、共通の点として生育旺盛で耐寒性が強いということが挙げられる。従つてわれわれ寒地に住むものとして

蔓性小輪系の
 ドロシー・パー
 キンスを以て露
 地の斜面を覆い
 地面を裝飾的に
 取扱つた例であ
 つて珍しい用い
 方である。ばら
 は段の上縁に列
 植してあり蔓の
 尖端は下方に誘
 引し、持ち上ら
 ないように尖を
 石ころに結びつ
 けて置く。

ものが多かつたが最近では次第に改良され、重弁、四季咲きは勿論、色彩、花径の点でも相当よいものがあらわれているようであり、房咲き半蔓性とともに耐寒力が失われぬならば北海道の蔓性ばら栽培者には頗る望ましいものであらう。

(7) 蔓性小・中輪系

(記号 Rambler あるものは R.)

これは本邦の原産種である照葉野いばら即ちウイクラライアナ種及び野いばら即ちマルチフロラ種から改良されたもので、根元から旺盛な枝条が盛んに萌出し、これが長く伸びて地上を這うようになる。初夏に小輪の花を房状に多数つける。単弁、重弁があるが香氣に乏しく、色彩もあまり多くない。

蔓性の中輪系は主としてウイクラライアナ系と H.T. 系との交配によつて出てきたもので、一季咲き四季咲きに近いものなどがある。

この系統は園芸品種としてのばらの中では強健な部類であるが、花径、花色、四季咲性などの形質を賦与するために、他の系統との交雑が進むにつれて強健さも失われてきがちであるが、今まで本道で栽培生育を続けている蔓ばらは大部分この系統である。

(8) 蔓性大輪系 (記号 L.C.)

この系統のものは T 系、H.T. 系、Penn. 系などの系統であるが性質が蔓性を現わすもの、あるいは蔓性種の芽条変異として蔓性となつたものなどを含み、後者の場合には通常の名称の前にクライミンク (Cl.) という文字を附して呼ぶことになつてゐる。

一般に蔓性種に比して伸長が旺盛であるが、蔓性となつてゐるため大休春咲きが主で、秋に少量の花を見る程度のもので、また蔓性であるから主幹の横枝に花を付ける。

(筆者は北海道大農農学部・助教授)